

金色のボタン

小川未明

青空文庫

ゆり子ちゃんは、外へ出たけれど、だれも遊んでいませんでした。

「みんな、どうしたんだろう。」と、往來の上をあちらこちら見まわしていました。けれど、一人の子供の影も見えませんでした。

そのうち、ポン、ポンと、うちわ太鼓をたたいて、げたのはいれのおじいさんが、小さな車を引きながら、横町から出てきました。そして、ゆり子ちゃんの立っている前を通って、あちらへいってしまいました。

つばめが、パイチク、パイチク、鳴いて、まぶしい大空を飛んでいます。

ゆり子ちゃんはいつもみんなが遊んでいる、お宮の前へいってみようと、お湯屋の前を過ぎて、広い道を歩いていきました。

このとき、ぴかりとなにか土の上で、光っているものが目にはいりました。

「おや、なんだろう。」と、ゆり子ちゃんは、その方へ走っていきました。

金色のまるいものが、道の上に落ちていました。ゆり子ちゃんは、それを拾って、小さな手で土を落としてみると、通りかかった、知らないおばさんが、

「お嬢ちゃん、なにを拾いました。ちよつとお見せなさい、金の指輪でないこと。」と、

そばへ寄つてきて、ゆり子ちゃんの手の中をのぞきました。

「おばさん、こんなのよ。」と、ゆり子ちゃんは、光るものを見せました。

「ああ、ボタンですか。ほほほ。」と、笑つて、そのおばさんは、さつきといつてしまいました。

ゆり子ちゃんは、しばらく立つて、その菊の花のような、模様のついている、金色のボタンをながめていましたが、見れば、見るほどめずらしくなってきました。

「おまわりさんに、とどけなくていいかしらん。」

そんなことを考えているところへ、仲よしの正ちゃんが、あちらから飛んできました。

「ゆり子ちゃん、なにしているの。」

正ちゃんは、すぐに、ゆり子ちゃんの持つているものを見つけました。

「金ボタンだね、きれいだな。僕におくれよ。僕、勲章のように胸につけるのだから

。」と、いいました。

「おまわりさんに、とどけなくていいか、私おうちへいつてきいてみるわ。」と、ゆり子ちゃんが、いいました。

「とどけなくていいんだよ。これは、ほんとうの金じゃないんだもの。ただのボタンじゃ

ないか。」と、正ちゃんは、しつかり握にぎって、放はなそうとしませんでした。

おとなしいゆり子ちゃんは、いやといえませんでした。そして、困こまったように、正ちゃんの顔かおを見みていました。

「ゆり子ちゃん、おくれね。」と、正ちゃんは、無理むりにもほしいのであります。

しかたなく、ゆり子ちゃんは、だまつたままうなずきました。

正ちゃんは、金色きんいろのボタンを自分じぶんの胸むねのあたりへつけて、勲章くんしょうのつもりで、大おお

股たに歩あるきました。

「ゆり子ちゃん、おいでよ。原つばの方ほうへいってみよう。」と、正ちゃんは、いいました。

いままで、たった一人ひとりでさびしかったゆり子ちゃんは、急にきゆう、お友ともだちができて、うれしくなりました。そして、自分じぶんの拾ひろった、大事だいじなボタンだけれど、正ちゃんにやっても、惜おしくないように思おもいました。

原つばでは、二人ふたりよりも大きい、清せいちゃんど、光こう一いちさんが、とんぼを捕とって遊あそんでいました。正ちゃんが、光ひかつたものを胸むねにおしつけて、歩あるいているのを見みると、

「正ちゃん、そのぴかぴか、光ひかるものなあに。」といって、真まつ先に清せいちゃんが、かけてきました。

「ゆり子ちゃんから、もらったんだよ。」

「ちよつと、お見せよ。」

「僕、大事なものだもの。」と、正ちゃんは、かくそうとしました。

「とりはしないからさ、ちよつとお見せよ。」と、清ちゃんが、いいました。

正ちゃんは、しかたなく、そのボタンを清ちゃんの手に渡しました。

「なあんだ、ボタンじゃないか。」と、清二がつまらなそうに、いいました。

「どこのボタンだろうな、洋服についていたんだね。花の形か、いや、車の形かな。」

と、光一もやってきて、頭をかしげていました。

「清ちゃん、このボタン知らない。」

「知らない。正ちゃん、道に落ちているのを拾ったんだろう。」と、清二が、聞きました。

「ゆり子ちゃんに、もらったんだよ。」

清二は、にやりと笑って、こんどは、ゆり子ちゃんの顔を見ました。

「ゆり子ちゃん、拾ったのだろう。」

ゆり子ちゃんは、うなずきました。すると、清二は、

「道に落ちているものなんか、拾うものじゃないよ。きたないから。」

そういつて、ボタンを高く空に向かつて投げました。

「あつ。」と、正ちゃんは、おどろいて叫びました。そして、上を見ていると、そのまま見えなくなつてしまいました。

「あれ、どこへいったらう。」

清ちゃんも、あわてました。ボタンは、どこへ落ちたか、音もしなかったのです。

「清ちゃん、返しておくれよ。」と、正ちゃんは、目にいっぱい涙をためていました。

「ほんとうに、どこへいったらう。」

「遠くへいつて、草の中へ落ちたのだらう。」と、光一がいました。

「正ちゃん、かんにんしてね。僕、とんぼを捕つたらあげるから。」と、清二は、あやまりました。

ゆり子ちゃんは、正ちゃんをかわいそうに思いました。二人は、手をつなぎ合つて、さびしそうに帰つたのであります。

それから、五、六日もたつてからです。ある日、ゆり子ちゃんは、お母さんにつれられて、省線電車に乗っていました。ゆり子ちゃんは、赤い帽子をかぶつて、赤いマントを着て、絵本を見していました。すると、どこから乗つたのか、支那の男の子が、ゆり子

やんと並んで腰をかけていました。その子は、年もゆり子ちゃんと同じくらいで、お父さんにつれられて、どこかへいくのでした。おかしいのは、その子は、黒い帽子をかぶって、黒いマントを着て黒いぴかぴかするくつをはいているのでありました。

電車に乗っている、ほかの人たちが、二人の子供を見くらべて笑っていました。支那の子は、だんだんゆり子ちゃんの見ている絵本をのぞきました。そして、わからない言葉で、ゆり子ちゃんに話しかけたのです。

「なあに、お母さん。」と、ゆり子ちゃんは、支那の子供の言葉がわからないので、お母さんにたずねました。

「そのご本をかしておあげなさい。」と、お母さんはやさしく、おっしゃいました。

ゆり子ちゃんが、絵本をかしてあげると、支那の子のお父さんが、こちらを向いて頭を下げました。そのうちに、電車が、つぎの駅へ着くと、支那の子は、ご本をゆり子ちゃんに返して、笑って、こちらをふり向きながら降りていきました。

「お母さん、あの子、かわいらしい子ね。」

「ちようど、正ちゃんくらいですね。」

「あの子のお家はどこなの。」

「さあ、どこでしょう。お母さんにはわかりませんわ。」

ゆり子ちゃんは、ぼんやりと考えていました。

「このご本、あげればよかった。」と、ゆり子ちゃんはいいました。

「見せてあげれば、いいのですよ。」

お母さんは、自分も子供の時分、人なつこかったことを思い出しました。どうかこの子が、いい人間になるようにと、心で祈つていられました。

「おばあさん、しつかりおつかまんなさい。」

黒い洋服を着たおじさんが、腰のまがったおばあさんの降りようとするのをしんせつに世話していました。

「やさしい、いいおじさんだ。」と、ゆり子ちゃんは、思つて、目をぱちりあけて見ました。ゆり子ちゃんは、はつとしたのです。おじさんの洋服の、金色のボタンが、いつか往來で、自分の拾つたのと同じだからです。

「まあ、ほんとうに不思議だわ。おんなじボタンだわ。」

ゆり子ちゃんは、もう二度と見られないと思つたのを見たので、飛び上がるよううれしい気がしました。さつそくお母さんに、なんのボタンかと聞いたのです。

「あのおじさんは、鉄道へつとめていらつしやるのよ。あのボタンのしるしは、車の輪ですよ。」

「菊の花じゃないの。」

「いいえ、車の輪なんです。」

ゆり子ちゃんは、鉄道のおじさんが、おばあさんをしんせつにしてやったのに感心しました。このことを正ちやんにあつたとき、知らしてやろうと思ひました。正ちやんは、まだ、鉄道のおじさんの洋服のボタンを見たことがないと思ひました。清ちやんも、光ちやんも、まだ知つていなかったのでしょう。ゆり子ちゃんは、みんなに、今日の話をして、教えてあげようと思ひました。

「鉄道につとめているおじさんが、道で落としたんだわ。あのボタンを停車場へ持つていつて、とどけてあげればよかった。」と、ゆり子ちゃんは思つたのです。

そのうち電車が、自分たちの降りる駅へついたので、ゆり子ちゃんは、お母さんに、手を引かれて降りました。

この日、ゆり子ちゃんは、いろいろのいいことを知つたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「金色《きんいろ》のボタン」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金色のボタン

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>